

幼なじみ

六月。シルの町には初夏が訪れていました。

晴れ渡った空から太陽がまぶしく照らしています。暑いほどの日差しですが、吹き抜けていく風はさわやかです。川辺のポプラが高い梢をざわめかせ、小さなハート型の葉をちらちらと銀色に輝かせています。

町外れに近い水車小屋では、水車がきしみながら回り続けていました。水車からこぼれる水の音が、絶え間なく繰り返されます。一年中、休むことなく続く川辺の歌です。

それを聞きながら、ジャックは橋を渡っていききました。大柄な少年で、少し気の短そうな仏頂面をしています。両手をズボンのポケットに入れて肩を怒らせ歩く姿には迫力があって、すれ違う大人たちが思わず道を空けます。事実、ジャックは町の不良少年グループのリーダーで、つい三年前ほどまでは、手のつけられない乱暴者として有名だったのです。

横道から大通りに出ると、ジャックは黙ったまま通りを眺めました。シルは小さな町です。目の前の石畳の道は国の主街道ですが、そこに建ち並ぶ店の数はそれほど多くありません。町の人に交じって旅人もひっきりなしに通っていきますが、ひなびた町の小さな店に立ち寄る者はほとんどいません。シルから歩いて一時間あまりのところにもっと大きな町があるので、そちらを目指して通り過ぎてしまします。

ジャックは通りに面した店の一軒に近づきました。間口の小さな雑貨屋で、扉の上に銀の鈴が光っています。その扉をくぐる前に、ジャック

クはポケットから手を出し、素早く襟元を整えました。

「いらつしやいませえ！」

リンリンという鈴の音と同時に、明るい女性の声が店内に響きました。細かい雑貨から食料品、農作業の道具までが所狭しと並ぶ奥にカウンターがあつて、そこに店員が立っていました。赤茶色の長い髪に縞模様のエプロン姿の娘で、なかなかの美人です。ただ、その大きな黒い瞳は、ちょっと気の強そうな表情を浮かべていました。

店員は入ってきたのがジャックなのに気がつくのと、たちまち顔つきを変えました。笑顔が消えて、伺うような表情になります。警戒しているようにも見えますが、その頬は赤く染まっています。

「あら、ジャック」

と店員はことさらそつげなく言いました。とても客に対する口調ではありません。

「あんたが買物だなんて珍しいわね。何が欲しいのよ」

「買物に来たんじゃねえ」

とジャックはぶつきらほうに答えました。愛想のない顔をいつそう無愛想にしながら近づいていって、店員の前に立ちます。そうすると、大柄なジャックは娘より頭二つ分も背が高いのですが、娘はにらみつけるようにそれを見返しました。

「じゃ何よ？ 冷やかしならお断りよ」

「ちよつと話があるんだ。店を抜けられるか、リサ？」

娘は少しの間、何も返事をしませんでした。ただ、にらむようにジャックを見つめ続けています。その顔がまたゆっくりと赤く染まっていくなを、ジャックは黙って見ていました。

すると、娘はつんと唇を尖らせました。いかにも気が強そうですが、同時にとてもかわいらしい表情になります。

「いいわ」

と答え、店の奥に向かって大声で呼びかけます。

「奥さん、ちよつと店番を抜けます！　すぐ戻りますからあ！」

とたんに怒ったような老女の声が聞こえてきました。娘はさつさとカウンターの下をくぐると、先に立って店の外に出て行きました。

ジャックとリサはこのシルの町に生まれ育った子どもたちでした。

二人とも十六才で、この六月の初めに学校を卒業しました。同級生ですが、決して仲が良かったわけではありません。誰からも怖がられる不良のジャックを、気の強いリサだけはいつもまっこうから非難してきたのです。弟のチムが強さに憧れてジャックのグループに入っていたので、なおさら黙っているわけにはいきませんでした。リサとジャックが口論する姿は町でも有名で、リサは口の悪い子どもたちから「間違つて女に生まれてきたヤツ」と呼ばれていました。

ところが、このとき、ジャックとリサは口論にはなりません。店の裏でリサは黙って小川の流れを眺め、ジャックもそんな彼女を見ているだけでした。リサはわざとらしいほど視線を合わせようとしません。どちらからも話を切り出せないでいる、もどかしい雰囲気があります。

やがて、思い切ったように口を開いたのはジャックでした。うなるように尋ねます。

「手紙、読んでくれたか？」

またすぐには返事がなくて、間が空きます。それでもジャックが待っている、やがて、リサがくるりと振り向いてきました。腰に両手を当て、胸を張るようにしてジャックを見上げます。

「一応読んだわ。てつきり冗談だとばかり思ってたんだけど」

「冗談なんかじゃねえ！」

とジャックが乱暴にさえぎりました。怒ったような顔は、リサに負

けないほど赤くなっています。リサは、ちよつと意外そうにそれを見返しました。また少し黙り込み、肩をすくめて言いました。

「そう言うけど、ジャック、信じて言うほうが無理な相談だと思わない？　あんたはずつとあたしを毛嫌いして、何かって言うって喧嘩をふっかけたり悪口言ったりしてきたじゃないの。それでどうして本当はあたしを好きだった、なんて言えるのよ」

きついほどにはきはきと話していたリサの口調が、最後に来て急に歯切れ悪くなりました。いっそう赤くなってしまった顔を、またつんとそらします。

ジャックは腕組みすると、怒ったような顔のまま言いました。

「嘘じゃねえたら！　ずつと気になっていたんだ。おまえはいつだって俺のことを全然怖がらずに、まっすぐに立っていて　俺はこの通りで、どう言ってもいいのかもわからなかったから、からかったり悪口言ったりしていたけどな。でも本当は　ガキの頃からずつと好きだったんだよ」

リサはまた黙り込みました。そらした目で小川の流れを見つめます。子どもの頃には男顔負けのおてんばだった彼女も、今では背が伸び、すっかり娘らしい体型になっていました。お下げに結っていた髪も、今は後ろで綺麗に束ねられています。初夏の日差しに髪が輝きます……

やがて、リサは溜息をつきました。真面目な顔でジャックを振り返ってきます。

「ねえ、ジャック、冷静に考えてみてよ　。あたしだけじゃなくてね、他のどの女の子でも、あんたに好きだって言われて喜んで付き合う娘がいると思う？　自分が今までにしてきたことを考えなさいよ」

「ちつ。相変わらずきついぞ、おまえ」

ジャックは舌打ちしましたが、怒りはしませんでした。自分が周り

からどう見られているか、自分でも充分承知していたのです。

「別に今すぐ俺と付き合ってくれとか言ってるわけじゃねえさ……。どっちにしろ、俺はもうすぐこの町を離れるからな。次にいつまた戻ってこられるかわからねえんだ」

その返事にリサは目を丸くしました。

「じゃ、あんた、軍隊の入隊試験に受かったの!? へええ……」

「そんなに露骨に意外がるなよ。これでもけっこうがんばったんだぞ。ラトスの道場に毎日稽古に通ったし、勉強だつてしたんだ。さつき、ラトスの町で正式に入隊許可証をもらつてきたところだ」

照れ隠しにしかめっ面をしているジャックに、リサはまた肩をすくめました。

「まあ、一応おめでとつ、つて言つてあげる。あのどうしようもない不良だつたあんたがねえ。今回の入隊試験つて、正規軍の試験だつたんでしょ? へええ……」

「だから、そんなに意外がるな! 俺の死んだじいさんはロムド正規軍で隊長までしてるんだぞ」

「だからつて、孫までそんなふうに出世できるとは限らないじゃない。でも、確かに正規軍に入隊したのはすごいと思うわ。シルの町ではたぶん五年ぶりくらいよね」

「じいさんはじいさん、俺は俺だ」

とジャックは言いました。妙に真剣な顔つきになっていきます。

「じいさんが隊長だつたから俺まで出世できるほど、軍隊は甘いもんじゃねえ。実力で上がつていくしかねえんだよ。確かに俺はこれまでどうしようもない肩みたいな人間だつたけどな、でも、その気になればきつと上に行けるはずなんだ。こんな俺でもな。そのために入隊したんだ」

リサはまた、ひどく驚いた顔になりました。つくづくとジャックを見つめてから、あきれたようにちよつと笑つて見せます。

「ずいぶんと変わったわねえ、ジャック。フルートに影響されたんじゃないの?」

とたんに、ジャックは懺然とした顔に戻りました。うるせえ! と昔のように乱暴にどなりまします。

「フルートは関係ねえよ! これは俺が自分で決めたんだ! 俺は変わる! 変わつてみせる! それをおまえに見てほしいんだ! で 本当に俺が変われたら 結婚してくれ、リサ」

リサは、ぽかんとジャックを見つめました。冗談でしょ? と言おうとしましたが、ジャックの真剣な表情を見てことばを飲みます。とまどつてまたそらした顔が、みるみる耳まで赤くなっていきます。

「今すぐ返事する必要はねえ」

とジャックは言いました。

「でも、俺が自分でも納得するくらい変われたら、その時に必ずプロポーズに来る。それまで待つてる いや、待つていてくれ」

リサはやっぱり顔をそむけたままでした。ジャックを振り向きません。そうして小川を見つめながら、リサは言いました。

「それ……別の女の子に言つてあげなさいよ、ジャック……。それくらい本気なら、きつとあんたに惚れてもいいって思う娘もでてくるわよ。あたしみたいなきつい女じゃなく、もつと優しい娘を選びなさいつてば……」

「馬鹿、俺は……!」

とまた声を荒げかけて、ジャックは急にはつとしました。確かめるような目になって、リサの後ろ姿を見つめてしまします。

「もしかしておまえ……他に好きな男がいるのか?」

どきりとしたようにリサが顔を上げたのが見えました。何も言わなくても、その態度がはっきりと答えを言っています。

ジャックは、かつとなりまします。

「誰だ、そいつは！ 俺の知ってるヤツか！？」

力づくで向き直らされて、リサは迷惑そうな顔をしました。

「やあねジャック。いないわよ、そんな人。ただ、あたしはジャック相手にそんな気になれないって。」

けれども、ジャックはまたふいに気がついてしまいました。ひらめくように頭に浮かんできた人物がいたのです。思わずまた声を上げてしまいます。

「フルートか！ フルートなんだな！？」

リサの顔が、いきなり青ざめました。気の強い彼女が言い返すこともできないで立ちつくします。大きな黒い瞳が今にも泣き出しそうににらみつけてきます。やっぱり、とジャックは考えました……。

けれども、リサはすぐに頭をそらして、ふん、と鼻で笑いました。

「冗談はやめて、ジャック。なんであたしがフルートなんかを好きでなくちゃいけないのよ。そりゃ確かに最近は何かつこうしつかりしてきたみたいけど、フルートはフルートよ。昔はあたしの後ろに隠れてぴーぴー泣いてたんだから。」

「だが、あいつは金の石の勇者だぞ。闇と戦って、世界中を救う勇者だ。」

ジャックが低く言うと、リサはまた肩をすくめました。

「それでもよ。あの子、あたしより二つも下じゃない。いくら勇者だって優しくたって、年下じゃ、全然つりあわない。」

そこまで言ったとたん、リサのことがとぎれました。急に声が出なくなったのです。そんな自分に驚いたように、リサは喉元に手を当てました。黒い瞳が涙でうるんでいます。

ジャックは声が出ませんでした。リサが涙ぐんでいるところなど、初めて見たような気がします。

その時、店から老婆の声が聞こえてきました。客だよ、いつまで油

を売ってるんだい！？ と怒っています。

リサは我に返ると、ジャックに向かって口を尖らせました。

「さあ、話は終わりよ。あたしは忙しいの。もう仕事の邪魔をしないでちょうだいね。」

それだけを言うと、くるりと背中を向けて店へ行ってしまう。駆けていく後ろ姿は、怒っているようにも、泣いているようにも見えました。

茫然とそれを見送ったジャックは、やがて、ちえっと口の中でつぶやいて、足下から石を拾い上げました。ごつごつと角張った石肌を手の中で確かめながら、ひとりごとを言います。

「やっぱり、俺の前に立ちやがるのかよ、フルート！」

大きな体で思いきり振りかぶって小川の中にたたき込めば、石はどぶん、と深い音を立てて川底に見えなくなっていました。後から後から流れてくる水が、川面の波紋をたちまち消してしまいます。

「こんちくしょう！！！」

ジャックは悪態をつく、肩を怒らせながら立ち去っていきました。

ジャックが入隊のためにシルの町を出発する日、大勢の人間が町の出口まで見送りに来ました。ジャックの父親や屋敷の使用人、父親の知人友人、近所の大人たち、学校の先生、同級生、ジャックが束ねてきた不良グループの少年たち。町長までが直々に来て祝辞を述べてくれました。今までジャックをどうしようもないごろつきだと罵ってきた人たちが、手のひらを返したようにジャックを賞賛します。それくらい、ロムドの正規軍に入隊するというのは難しく、名誉なことだっ

たのです。

ずっとジャックを我が家の恥さらしだと怒り続けていた父親が、この日は満面の笑顔でいました。自分よりはるかに大きくなった息子を、人々の見ている前で抱きしめ、さすがはわしの息子だ、じいさまに負けない立派な軍人になってこい、と言います。わかったよ、と答えながら、ジャックは内心どうにもこそばゆいものを感じていました。入隊試験に合格しただけで人の態度はこんなにも変わるのか、と驚いてもいました。

最後にジャックは不良グループの副リーダーのベックを見ました。自分に一番古くから従ってきた自分の一人です。入隊試験を受けるために真面目に稽古や勉強をするジャックに、一時は反感を強めたこともありましたが、とある事件をきっかけに、それもすっかり収まっています。

「みんなの面倒をしつかり見ろよ」
とジャックはベックに言いました。周囲の人々には聞こえないくらい低い声です。

「あいつらがおまえを見捨てても、おまえは絶対にあいつらを見捨てるな。あいつらに最後まで責任を持って。それがリーダーの務めだぞ」
となりちらし、力で子分たちを束ねてきたジャックです。悪いことも、人を傷つけることも平気でしてきましたが、それでも、子分たちに対してはきつちりとした信念を持っていたのです。ジャックからグループを引き継ぐことになっているベックは、黙ってそれにうなずき返しました。

人々の大歓声に送られて、ジャックは旅立っていきました。目指す先は、ロムド城がある王都ディラです。そこで正式に入隊し、所属の隊に振り分けられて任地に向かうのです。

石畳の道を馬で進んでいくと、やがて歓声は後ろに遠ざかり、行く手に門が見えてきました。町の終わりを示す場所です。その門の片方の柱に、一人の人物がもたれかかっています。とても小柄な少年です。降りそそぐ初夏の日差しに、金の髪がきらめいています。

「フルート」
とジャックは驚きました。次の瞬間には、苦いもので胸がいつぱいになります。この日、リサはジャックの見送りに来なかったのです。どんなに待っても、密かにあたりを見回して探しても、どこにも姿は見当たりませんでした。

「なんだ、なんの用だ」
とジャックは馬の上からフルートを見下ろして尋ねました。いつも以上にぶつきらぼうな声になっています。フルートは、本当にあきれくらしい綺麗で優しい顔をしています。何も知らない者が見たら、少女が男の子の格好をしてそこに立っていると勘違いしそうなほどです。

フルートには、ジャックが機嫌を悪くしている理由はわかりませんでした。わからないので、気にもとめずに、ただこう答えました。
「もちろん君を見送りに来たんだよ。あっちにはみんながいて騒々しかったから、ここで一人で待ってたんだ」

ジャックはすぐには何も言いませんでした。今から一年半あまり前、初めてフルートが金の石の勇者としてシルを旅立ったとき、ジャックはこの門までフルートを見送りに来ました。フルートは本当に気になわない大嫌いなヤツだったのですが、何故だか気になってしかたなかったのです。フルートはその時のことを覚えていて、同じ場所へジャックを見送りに来たのに違いありませんでした。

ジャックはいつそう不機嫌になって言いました。
「いいの、金の石の勇者がこんなところでのんびりしていて。最近

どこにも出かけていないようじゃねえか。怠慢だぞ」

正直、これは言いがかりです。ジャックはこれからシルを離れていきますが、フルートは町に居続けます。リサがフルートとこれからも町でしょっちゅう顔を合わせることになるかと考えると、どうにも面白くない気持ちになるのです……。

くすり、とフルートは小さく笑いました。この少年は、いつも決して怒りません。子どものように幼く見えるくせに、その目と表情だけはいやに大人びていて、ジャックよりはるかに年上のような態度を見せます。

「仲間の一人が修行中でき、あと半年しないと修業が終わらないんだよ。敵もずっと動きを見せないでいるしね。動きたくても今は動けないんだ」

そう答えるフルートの声は、まだ変声期前のボーイソプラノです。口調も優しく、本当に女の子が目の前にいるようです。それなのに、この少年は勇者なのです。世界を救うために選ばれて闇と戦う、金の石の勇者なのです。

ジャックは思わず馬の上で拳を握ると、それをフルートに向かって振り回しました。

「見てろ！ 俺は絶対に軍隊で偉くなってみせるからな！ 絶対に、誰よりも勇敢に戦い抜いて出世して 金の石の勇者より立派な英雄と呼ばれてやる！！」

フルートはびっくりしたようにジャックを見ました。あからさまにぶつけられる闘争心に、面食らった顔をしています。

と、その顔が急にまた微笑を浮かべました。少女のように穏やかな笑顔は、その奥に、なんとも言えない色合いをはらんでいました。痛み、苦しみ、悲しみ、切なさ、そして、それらすべてをあきらめるような不思議な優しさ

ジャックが思わずとまどっていると、フルートは静かな声のままて言いました。

「金の石の勇者は、そういつのとは違うんだよ。みんなが言うような、そんな素晴らしいものなんかじゃないんだ……。でも、うん、ジャックはきつと強い軍人になっていくよね。国を守る勇敢な戦士になっていくと思う。がんばってよね。応援してるからさ」

何故だか、途中で話をはぐらかしたように見えたフルートでした。優しい笑顔の陰に、ことばにできない微妙なものが漂い続けます。歳にまつたく似合わない、暗く深い影です……。

ジャックは何となく胸騒ぎを覚えました。不吉な予感に、ついこう口走ってしまいます。

「死ぬんじゃないぞ、フルート」

「君こそね、ジャック」

とフルートが落ちついて切り返してきました。

「軍人になると、戦死したときに階級を上げてもらえるらしいけど、そんなふうにして偉くなりたいわけじゃないんだらう？」

「あ、あたりまえだ、馬鹿野郎！！」

とジャックは真つ赤になつてどなりかえました。こんな野郎を心配して馬鹿を見た！ とたちまちまた不機嫌になります。フルートはくすくすと笑いました。こんなふうにはフルートがジャックをからかうこと自体、普段とは違っていたのですが、ジャックはそれに気がつきませんでした。

「気をつけてね、ジャック。君の上に武運があるように」

と言われて、ふん、とジャックは鼻を鳴らしました。

「てめえなんざに祈ってもらいたくなんかねえよ！ まったく、やな野郎だ！ とつとと帰れ！」

馬の上で肩を怒らせ、憤然とまた進み出します。門に立つフルートのほうは、もう振り向きもしません。

それでも、フルートはジャックを見送っていました。大柄な若者を乗せた馬が街道を東へ歩いていくのを、ずっと見つめ続けます。その馬と人の姿が小さくなり、声も届かないほど遠ざかったとき、フルートは静かな声で言いました。

「さよなら、ジャック」

そのまま、祈るように目を閉じます。

初夏の空は晴れ渡り、荒野の果ての地平線まで青く続いています。フルートが再び仲間と集まり、黄泉の門の戦いに巻き込まれていくのは、これから五ヶ月ほど後のことです。世界はまだ明るく静まりかえり、平和は、いつまでもどこまでも続いているように見えました。

(2007年12月23日)